



羅針盤

中西 健史

Takeshi Nakanishi

明治国際医療大学皮膚科



やればやるほどわからなくなる ～皮膚潰瘍の分類～

このたび、皮膚潰瘍特集の責任編集を依頼されました。皮膚潰瘍は、皮膚を構成する成分が消失しているわけで、皮膚の疾患というよりも、その周辺環境によって発症あるいは増悪が左右されます。皮膚を解析しようにも、皮膚そのものがないために、分子生物学的な解析とか、培養系を確立して研究するとか、はたまた遺伝子解析などできるはずもありません。また、先人たちが築いてこられた教書にも、皮膚潰瘍という独立した項目はありません。それだけに、本特集のお話があったときに、まずは分類とかアルゴリズムとか、そうしたものがないこの領域をどう整理すればよいか、頭を抱えました。結果的には、ごくごくシンプルに、毒素のような細胞傷害性物質、皮膚への栄養供給不足、周辺の圧などの環境要因などが皮膚の構成要素を壊死させているという素人っぽい考え方で分類してしまいました。そこで気がついたのは、原因不明の皮膚潰瘍がいかに多いかということでした。裏返せば、地方会で報告した珍しい皮膚潰瘍も、いざ論文にしようとする、皮膚潰瘍の成因があまりにもspeculationにすぎないため、投稿をためらってしまうのが現実ではないかと思えます。

本特集は、まず「皮膚潰瘍」をキーワードに、医学中央雑誌の「会議録」にしぼって検索をかけました。すで

に論文化されているものを除外し、稀な症例をピックアップして、その発表者あるいは転勤された場合は、その上司に執筆依頼をさせていただきました。候補にあがった症例は60ほどになり、ご辞退された先生もいらっしゃいましたが、それでも1回の特集ではカバーしきれないことから、2回に分けて特集を組むという壮大な計画になってしまいました。出来上がりはまったくわかりませんが、10年ぶりのVisual Dermatology 責任編集で大いに緊張しております。この企画と同時に、日本皮膚科学会の『創傷・褥瘡・熱傷ガイドライン』の改訂作業を進めなければならず、十分に練られた特集になったかどうか、心配は尽きません。

読者の先生方のご批判も多いかと思いますが、「この症例は、こうやって皮膚潰瘍になったんじゃない?」というご意見もどんどんお待ちしております。

会議録止まりであった症例を文献として引用できるようになれば、今後、先生方が経験されるナゾの皮膚潰瘍も、「ああ、こういう報告があったんだ」と、自信をもって診療に臨むことができるようになると思います。本特集が、そんなちょっとしたお役に立てれば、これほど嬉しいことはありません。